

教祖伝と聖地の構造

——解脱会の信仰の世界——

鳥井由紀子

はじめに

解脱会は、現在公称信者20万余、全国に400近くの支部を持つ中規模の教団である。立教の年は1929年、回漕業などを営んでいた岡野聖憲（1881—1948）により東京で設立されている。教団の自己紹介の言葉で、「超宗派」⁽¹⁾という言葉が使われていたり、排他的でないことから、従来の研究では、「民間信仰を包摂する」⁽²⁾「民間信仰との親和性」⁽³⁾「信仰形態の多様性」⁽⁴⁾などの言葉によって特徴付けがなされている。また、さまざまな形態の信仰を含み、中核となるものがない⁽⁵⁾とも言われている。

しかし、多様性や、さまざまなものの包摂と見えるところにも解脱会としての論理はあり、そのアイデンティティーを示すシンボルが存在している。ここでは、私なりにとらえてみた解脱会の信仰の世界の一貫性と、それを支えている「歴史」ないし「神話」、つまり、信者に共有され、また、共有されるように提示されている記憶の集積と、それが物体化され形象化された場、およびそこに付与された意味について述べてみたいと思う。⁽⁶⁾

1. 解脱会の信仰の世界

解脱会の信仰の世界を支えているのは「五法」⁽⁷⁾（「御五法」とも書く）である。「五法」とは教祖の書いた札であり、教祖の力でもある。教祖没後の現在では「法燈をうけついだ」人物である「法主がつかさどる」⁽⁷⁾とされている。「五法」は解脱会の活動のあらゆる場面にほとんど常に現れると言っても良いものである。解脱会では、人間の活動している目に見える世界と、霊の活動している目に見えない世界を前提としているが、「五法」は、この二つの世界を媒介する力である。解脱会の世界観の前提となっている霊の世界とは、様々な力だけが働いている世界である。それは「神仏」「諸霊」などの世界であるとされている。霊という言葉は、「宇宙の大元霊」「神霊」などをはじめ、「人霊」「祖霊」「万物万霊」「生霊」「邪霊」など様々なものに用いられるが、すべて、直接人間が交流できるもの⁽⁸⁾とされている。

霊の世界は、病気などの形で人間の側に働きかけてくる。人間が、この霊の世界と秩序だった交流を行い、その働きかけをコントロールしていくことを可能にするのが「五法」であるとされている。その最も顕著なものは「五法修業」と呼ばれる霊との交流儀礼で、直接に霊の意志が確認される。これは、神前に向かい「五法」を合掌の中にはさみ、瞑目した状態で行なう。「仲介者」と呼ばれる人がかたわらで霊にことばをかけ対話を行なう。

この交流儀礼の結果知られた霊の意向に基づいて、「お詫び」と呼ばれる儀礼や「供養」が行なわれるが、それらにはすべて、それぞれの用件や霊の名称を書いた文字の上に「五法」を重ねた札が用いられる。その力によって人の側の意向、意志が霊の世界に「とどく」と理解されている。

家屋には、てんじんちぎおおがみ「天神地祇太神」、ごちによらい「五智如来」、げだつこんどう「解脱金剛」の三つの札を中心として、各種の札が祀られる。基本とされるこれらの他に、玄関、家の四隅、台所、便所などにそれぞれに応じた札が祀られ、拝礼が行なわれる。年末には、「靈魂送り券」と呼ばれる同様の「五法」の札により、各信者の住んでいる地域の神社（氏神）を通じて、古い札が返され、新しい札によって祀り直される。

あまちやくよう「天茶供養」と呼ばれる先祖関係の諸霊の供養に用いられる札も、「五法」を霊の名称と重ねて書いた札である。

信仰歴を重ねて行くと、家屋の守護神として祀られていたものや、各人の守護神とされるものの祀り直しが行なわれる。つまり、「五法」によって、新たに祀るわけである。

また、人生の様々な危機、出産、病気、死などに際しても、「安産守」「護符」「通用門鑑」などの札が用いられるが、これらもすべて、教祖のあらわした「五法」の働きとされている札である。これらは、身につけたり、ちぎって飲んだり、棺に納められたり、それぞれのケースに応じて使われる。

「神仏」は「五法の働き」によって「活発に活動する」とも「正しく働く」とも言われ、また、諸霊がその力によって「札につく」とも言われる。「五法」の力によって人の側の意志やもの（たとえば、「天茶供養」の際の甘茶）がとどくともされている。いずれにせよ、霊の世界との交流を可能にする力であり、二つの世界を媒介するものであるとされている訳である。

解説会の宗教的世界とは、この「五法」の力によって、霊の世界と交流し、コントロールし、新しい秩序をつくり出して行こうとするものである、ととらえることができる。その際、個々の信者は、その新しい世界を説明することばを様々な機会に受け取っていく⁽⁹⁾。これらのことばは教祖のことばとして伝えられているものが基礎になっている。これらが、くり返し、信者どうしの間で語られ、その交流の中で伝えられて来ている。これらのことばに加

えて、そのことばを語った人物の生涯の物語があり、これもこれらの説明のことばに付随して、教祖に関する集団の記憶として伝えられて来ている。それは現在では「教祖伝」という形にくみあげられ、一つの物語となっている。ここでは、「教祖伝」の中核をなす『解脱金剛伝』及び、解脱会のまとめた他の資料（ほとんどが前者に吸収されている）、信者の話などから浮び上がって来る一つの構造についての記述を試みる。焦点があてられるのは、教祖の生涯の物語であり、その中で「五法」とともに最も重要な位置を占める聖地の意味である。教祖の生涯の物語のテーマを述べた後、現在の聖地の構造についての記述を行なう。

2. 教祖伝

前にもふれたが、「五法」はただの抽象的な力ではない。それは教祖の書いた札であり、教祖の力と言っても良いものである。「解脱金剛」としてまつられている教祖に対する挨拶のことばは「御五法の精神を学ばせていただきます⁽¹⁰⁾」と始まる。「五法」の力を信者が感じる時、「南無解脱金剛」の法号を唱える時、朝夕の礼拝で「解脱金剛」に挨拶をする時、そこには何らかのかたちで教祖岡野聖憲の記憶が伝えられている。また、儀礼の形や意味は教祖に発するとされているのであるが、教祖はそれらを信者に与えたというだけの存在ではない。「拜礼行事」の中で「我らの高調する理想は解脱金剛である。」⁽¹¹⁾と唱えられるように、その行動全体が信者の生き方の模範となる人物と受け取られている存在である。

教祖の記憶は、古い会員との話や「出講員」の話などで口づてに伝えられ、あるいは、それらをまとめた形のいくつかの出版物や、毎月信者の受け取る雑誌の記事等で伝えられる。「御五法の精神」ということばがこれを表現している。この教祖に関する記憶、新しく構成され伝えられて行く記述には、解脱会独自の色彩、雰囲気、テーマといったものが付随している。それは「我らの高調する理想」などのことばで規定され、信者が受け取って記述や語りを伝えていく基盤を形成している。

ここで、教祖伝として取り上げるのは、1978年に出版された『解脱金剛伝』を中心とする一群の出版物である⁽¹²⁾。『解脱金剛伝』は、教祖に関する話をテープにとったもの、聞き書き、教祖の生家の蔵から出て来た教祖の手紙、教祖の名前で発表された文章などがもとになっている。これを、文章の書ける人を雇って文章化し、編纂委員会の読み合せ、校閲などを経て、委員会の名前で発表したものである。制作過程の性格上、それまでに出版された教祖に関する思い出などを集めた本などとの重複箇所も多い。出版の意図として「真実を誇張することなく、ありのままを後世に残すことが、われわれの最大目標でした」と⁽¹³⁾

主張されている。また、「この伝記は世界の救世主である尊者のご生涯を出来得る限りの資料に基づいて編纂したものであり、求道者にとっては又と得難い人生の指針となるであろうことを固く信じるものであります。」⁽¹⁴⁾とも記されている。つまり、解脱会の宗教的世界の来歴を記した書物であり、その世界に生きる信者にとっての解脱会の起源、「歴史」を記すことが意図された記述である。それは、「人生の指針」、信者にとってのモデルを描くことも意図している。ここでは、『解脱金剛伝』を中心としたいくつかの伝記的記述を、「新しい宗教的ビジョンの確立に⁽¹⁵⁾関与する聖なる伝記」としてとらえる。そのような伝記においては、「報告されたたった一つのエピソードも、結果として出て来る神話的観念を構成する働きを持ち得る」⁽¹⁶⁾と考えられる。このような観点から見る時、解脱会の教祖伝は我々に何を伝えて来るのだろうか。

3. 教祖の物語の基本テーマ

『解脱金剛伝』は、一つの出世物語、成功物語となっている。農家の次男が数々の苦難を経て海運業で成功し、大病をきっかけに宗教的世界に目を開かれ、教えを広め、再度苦難を乗り越えて、死の直前まで人々の救済に挺身し、信者に師と仰がれて死ぬまでの物語である。大病の時甘茶を飲まされて回復し甘茶の力にめざめたという回心体験、僧侶神職行者などを訪ねたり、神社仏閣をめぐるたり、山の中で修行をしたとかの宗教家としての修業訓練準備体験が、海運業が徐々に退潮に向かって行くと言う記述の中におりまぜられている。教祖は、信心深い家風の中に育ち、寺の和尚に話を聞きに行くような、宗教に関心を持つ子供として描かれる。また、1948年に死ぬ直前まで「ヤミ屋と疑いをかけられた」⁽¹⁷⁾ほど「物資の交流」を盛んに行っていた人物、さいごまで商売人としての器量を失わなかった人物としても描かれている。

この物語は、前半と後半に明確に分けられている。分岐点は、岡野が「^{おおがら}太神」の力に打たれ、「^{ごれいち}御霊地」が現れ、また、岡野が「太神」と一体化して「五法」が現れた、とするエピソードである。教祖の呼び方も、前半は「英蔵」（岡野の俗名、後に僧籍をとる）、後半は「尊者」となる。「五法」と「御霊地」が解脱会にとって最も重要なものであると考えられていることは、解脱会会規でこの二つだけがそれぞれ「永久に尊奉する」、「永遠に護持する」⁽¹⁸⁾、と永遠、永久のことばを冠されていることから知られる。

1881年の誕生から1929年の「御霊地の⁽¹⁹⁾顕現」「⁽²⁰⁾御五法の顕現」までの話はこうである。

岡野は酒屋の丁稚奉行から始まり、賃機の失敗、朝鮮での商売、北本宿（埼玉県の中部、岡野の生家の所在地）での織物販売など様々な仕事を試みるが成功しない。倒産し、

脱税の発覚で借金を抱えたまま東京へ逃げ出したのが1909年。浮浪者から沖仲仕を経て回漕店に入り頭角を現す。番頭になりやがて自分で店を動かすようになる。以前から親しくしていた芸者と結婚し、料亭の経営も始める。海運業界でも成功し経済的にも豊かになるが、1925年大病をわずらい、回復後宗教的なものに興味が向きはじめ「各地の神社仏閣詣で」をしたり、行者などとの接触を始める。木材を買い付けに行った丹沢山中で一人で修行をしたりする。そして1929年1月1日、故郷北本宿の氏神へ初詣に行った際、近くの畑の中の一本松の小祠にひきよせられ、そこで「太神」の声をきく。これが「開教の啓示」であった。数日後今度は親しくしていた日蓮行者を伴い再度この地点を訪れ、この地が「太神」の力が働く霊地であることを確認する。次いで、5月8日（「御五法開くの日」とされている）、夜中に書き物をしていると「巨大な金色の光体が強烈な力で体内に入り」⁽²¹⁾ 霊眼で金色の文字を見る。最初の三文字、続いていくつもの霊文字を見、手は自動的にそれを写しとっていた。この時から岡野は「御法体」となり「神人合一の境地」にはいった。この時は「宇宙大霊より神授かりし御五法の顕現の時」でもあった。後それは多聞寺の宝印塔の文字に似ていることが確かめられた。

これが立教の年とされる1929年までのあら筋である。ここに至るまでの記述の中で物語られるエピソードには、ひとつの共通したテーマがある。それは北本宿へ向かう方向性である。岡野はなんとかして自分の生家と北本宿で認められようとしている人物として描かれているのである。代表的、典型的なエピソードを年代順に整理してみる。

その1：織物組合の仕事に失敗して借金をかかえた上、脱税で裁判所の判決を待っている時に家族にあてた手紙の一節。自殺をほのめかす。「生は当年二十九歳を一期として両親兄弟姉妹に先立つ不幸の罪其許に多罪す。……生は自宅の為め身の為遂々目下の不結果となり実に残念此の上もなし。……生末だ妻子なき身一つの今日好時期と決す。人間は無期の命魂、有期の身体なれば是非なく無期の魂に以而再生せん。今後再生後は父母兄弟姉妹に身骨尽くす決心なり。……」⁽²²⁾ 死後魂で親兄弟に尽くすという言い方である。

その2：回漕店に入り、生活が少し安定し始めたころのエピソードとして語られているもの。岡野は東京での仕事が終わってから高崎線の最終便で上野から桶川へ行く。そこから歩いて北本宿へ。氏神、先祖の墓と参拝し、生家の前に土下座して「……いずれ近い日に成功して帰って来ます。……。きっと立派になって錦を飾ってみせる。」⁽²³⁾ と決心を固める。そして夜明けを待ち再び歩いて桶川へ行き始発電車で帰る。岡野にとっての「本家」⁽²⁴⁾ の重要性が語られるとともに、現在の「御霊地」参拝の原型が描かれている。

その3：海運業界で成功し経済力がついて来たころの話。1916年、東京三河島家畜市場の牛馬の糞を肥料として北本宿へ送る。1927年にも、三河島汚水処理場の沈澱物を肥

料として北本宿へ送る。経済力がついた分だけ、この方向性は物質的な援助の形になって来ている。

その4：岡野は鉄道の駅開設にも尽力する。1916年、桶川一鴻巢間の中間に位置する北本宿では、駅開設運動が起る。岡野は本家にいる兄に工場誘致計画、土地買収などに関して意見を書き送る。この第一次の開設運動は経済的理由で成功しない。1924年、再び運動が起こると、岡野は開設資金の半分に近い5,000円を出資する。1927年、開設許可になるとさらに一万円の株券を出し、意見の分かれていた駅の場所を本家近くにもって来るため、親戚中の男を集め夜中に基礎工事を行ない場所を取ってしまう。負債を背負って故郷を追われた男が経済力をつけて故郷に対し負債返済以上の貸しを作っていく。岡野の「援助活動」は皆北本宿に向けられている。

その5：1928年6月駅舎完成。8月開通式。岡野は「……関係者御一同諸君に宜敷御伝達相成度候。新設駅開設後、地方一新、進歩発展、御祝福の外なし。」と書き送る。翌1929年1月1日、先に述べたように生家近くの小祠付近で「太神を世に出せ」という声にうたれ、5月8日には「御五法」が現われる。

ここまで要約した教祖伝中のエピソードの中で岡野の関心の向いている先は北本宿である。経済的な成功も、それを基盤にしたはでな生活もそれだけでは岡野にとって完結したものではなく、生家（「本家」）、故郷の人々に認められなければ意味を持っていないかのようなものである。このような岡野の行動は「本家」あるいは故郷という場の中での自分の位置を作り出し承認を得て行こうとする行動とすることができる。また失われたものを回復して行く行動、負い目を返済して行くプロセスと見ることもできる。ここまでの物語の中で、「本家」、故郷は岡野にとって、自己の存在を意味あるものと感じとることのできる場、自己の確認の場である。その地点が、様々な努力の末に、岡野に聖なる地として現われて来る。これは岡野の生活世界、存在の中心とも考えられる地点に、肥料を送り、鉄道の駅をつくるという形で、道がつけられ、エネルギーの通路が開かれることであったと見ることも可能である。ここまでの物語で、岡野は自己の存在の基盤であると感得していた場で、自己の位置を回復しようと行動する。そしてその行動の頂点に「御五法の顕現」「御霊地の顕現」と題されたエピソードが配されている。全編中、「顕現」ということが使われているのは、この2ヶ所だけである。自己の位置を回復しただけでなく、さらにそれを乗り越えて、「神霊の鎮まる地」として、岡野にとっての意味は転換される。そして岡野は、「五法」と、現在その「五法発祥の地」とされ、「五法がとくに強く働く」ともいわれている「御霊地」を信者にもたらした、と語られる。

4. 聖地の成立

それでは、教祖伝の中で、聖地の成立の過程は、どのように描かれているのだろうか。今度は、それに焦点をあてて、述べる。

1928年ごろから下高井戸（現在の東京都杉並区）にあった岡野の別荘に、「下高井戸のダンナさんはすぐに病気を直してくれるそうだ」という評判を聞いた人が集まってくるようになる。このころから1931年ごろまでの岡野の活動を追ってみると次のようになる。

⁽²⁶⁾ 1 札（今でいう御五法だが御五法ではないという）をある女性の合掌にはさませ、その人の口や動きを通じて霊と対話をして、子ども（彼女のおいだろうという）が口をきかなくなった原因を見つけ出した。その子がその場で「おばちゃん」と声を出したので見ていた者が驚いた。

⁽²⁷⁾ 2 （当時子どもだった人の記憶）岡野は、信者の家の二階で床の間を背にして、和服姿でテーブルを前にしてすわっていた。このものすごく偉そうなおじさんを囲んで数人のおとなが話を聞いていた。岡野は話をしながら寒冷紗に黒い墨と朱の墨で絶えず何かを書いていた。書いたばかりのものを渡され、当時は「天地太神」とかかれた掛軸一本だった御神前を前に軽く目をとじてすわるように言われた。寒冷紗をはさんだ手がガタガタ動き出し止めようと思っても止まらなかった。終わると岡野は「やっぱり子供はきれいだから早いねエ」と言い、「栄ちゃん、どうだびっくりしたかい？ 今、栄ちゃんに神様がお降りになったんだよ。これからも一生懸命やりなよ。学校の勉強や試験を神様がみんな教えてくれるようになるよ」と言った。

⁽²⁸⁾ 3 胃病に苦しんだ人が岡野を訪ねた。岡野はその人が入っていた宗教を言い当て、「そんなおかしい信仰に凝り固まっていると、今に気が狂って、大通りを尻をまくって歩くようになるぞ」言って、驚いている彼女に四ツ切りの半紙に何かを書いて渡し、「これをあげるから、一心に今までのことをお詫びし、供養するんだよ」と「天茶」の供養の仕方を説明した。家で、天茶をかけつつ先祖の成仏を祈り、自分の至らなさを詫びた。3日もたつと札はドロドロに溶けた。もったいないので飲んだ。その後も供養を続け胃病は治った。

⁽²⁹⁾ 4 妻に連れられて、下高井戸を訪ねた男性。警官だったので拳銃を外から見えないように持っていた。岡野は、あいさつも終わらないうちに、「梶原さん、そんなものを持っていても身は守れないよ。これを持っていれば大丈夫だ」と笑って、「天五色大天空神」と五法を入れた札を渡した。恐れ入って会員になった。

⁽³⁰⁾ 5 娘の病気で苦しんでいた女性。四谷（岡野の自宅、現在の東京都新宿区にある地域）に岡野を訪ねた。岡野は「埋もれているものがあるな」と言った。屋敷内の守護神の稲

荷が無縁同様になっている、祀り直して、今までのお詫びをし、以後給仕を続ければ娘はなおと指摘し、「しかし、今までの稲荷では大した力も出ないだろうから昇格してあげよう」と言って、筆をとって、「天あめ圀くわん蔵ぞう五柱ごしやう五成いなり大神おほがみ」という札を書き、「これをお祀りしな」と渡した。言われた通りにしたら、娘の病気は治り、この人は熱心な信者になった。今度は岡野がこの人の家に通うようになり近所で評判が高まった。岡野が世に出したこの埋もれた「靈魂」は力を発揮し、この稲荷に参拝に来る人がふえた。後、岡野は同家の弁財天を「天五色弁財天」として祀り直した。

岡野が札を書いて渡す。それが何らかの力を発揮する。恩恵は別の所から与えられる。という筋書きの活動によって、岡野のもとに人が集まって来るようになるのである。

1931年5月8日、このように東京で集まり始めていた信者をつれて、岡野は北本宿への集団参拝を始める。これは「第一回宝篋印塔参詣」と題され、上野駅に集合し高崎線以北本宿駅（現在の北本駅）へ行き、氏神の天満天神社、多聞寺、岡野家先祖の墓、一本松（「開教の啓示」の小祠）、会長生家、宝篋塔とまわり、会長生家で弁当と記念品をもらい、お茶を飲んで、また鉄道で上野へ帰る、というものである。約50名の参加があり、岡野が兄を通じて集めた地元の人と合わせて総勢100名ばかりで参拝した。⁽³¹⁾

また、このころから、岡野は毎月8日と25日に北本宿への月詣りを始める。

「会もごく初めのころ、尊者のお伴をして御霊地に参拝にまいりました時は、いつも氏神様、宝篋印塔、ご先祖のお墓、そして太神様という順序でした。」⁽³²⁾

岡野の力を認めた人々が岡野の行動を同様にくり返すようになっていく。

1933年か1934年ごろとして次のような思い出が語られている。新聞で関東十霊場の投票があり、「会長先生は『今はいけない。とつても十霊場なんて入れやしない。十三番か十四番でなきゃはいれないからよしなさい』と言ったにもかかわらず信者が投票したが「結局、……北本宿は十四番でした。」というものである。⁽³³⁾「御霊地」と呼ばれるようになる所が、すでに信者に共有された聖なる地となって来ている様が物語られている。

同じ1933年、34年の北本宿の様子は次のようにも語られている。

「北本宿駅前には松屋ともう一軒の家があったきり。御霊地とはいっても天神地祇のみ社は、五、六人も入ったらいっぱいになるという程度の大きさで、み社の前の芝生は畑で、み社に参詣する参道は、巾三尺ばかりの畑道であったのです。畑の作物をふみ倒さないように気をつけながらおまいりしたものです。」⁽³⁴⁾

また、「……点在する農家は教えるほどしかなく、北本宿という名から感ずる寂れた宿場であった」⁽³⁵⁾とも語られている。この北本宿で、1933年から岡野は大祭を年2回開くようになる。参加する人数がふえて行き、「二、三年後には、み社の前の畑地を買収し広場

とした」⁽³⁶⁾のである。大勢の人をむかえ入れる体制を整えつつ、1937年まで毎年臨時列車がふえ、大祭参加者は増加して行った。ホームにおり切れず窓から踏み台を使っておりるほどだった、ということが列車を背景にした記念写真とともに語られる。⁽³⁷⁾

巡礼という集団的行動が岡野の力を認める人々に共有される聖地を作り出して行く。岡野を介して、岡野にとっての聖なる場として現われた地点が、岡野の力を認めた人々によって、その人々に共有された聖なる場として発見されて行く。

1937年発行の『解脱要典』には「五法則」「三綱五常」「祝詞及挨拶」「霊の修業に就いて」に続いて歌がいくつかのっている。「解脱の道」「大自然の教え」などとともに「本宿まうで」というのがある。「一、……二、……、三、やがてなります天下の名所／天地宇宙の神靈魂や／鎮靈おわしますぞえ天國いなりさま蔵五柱五成、四、ほんに嬉しやその御威徳は／四百四病しひやくしびょうも日限りで全快る／どんな祈願わがひもみな就成ふ、五、何はさてをき本宿まうで／風にひらめく五色の旗は／天下泰平の御禮まるり」

この「やがてなります天下の名所」ということばは、いくつかのバリエーションで岡野のことばとして伝えられており、現在、北本宿が北本市となり東京への通勤圏にも入り、店もふえ町らしくなっていることは、岡野の予言の成就ととらえられている。

5. 承 認

3.では、立教の年までの岡野の行動を貫く一つの方向性が、生家、故郷北本宿での自己の位置の回復をめざすものであり、場の意味を転換しようとするものであることを見た。これを岡野の行動が向かった先から見ると、それは岡野を新しく承認しなおすことである。また岡野もその目標地点であったものの意味の転換を通して、それを新しく承認するのである。この承認ということも、1つの重要なテーマである。

伝記の物語の中で、1937年ごろから岡野の活動は変化を見せたと語られる。その1つは「会長は商売の話ばかりするようになった」と信者にうけとられる面である。取材にあたった解脱会の出版部員が、これ以後に入った人は、商売の話が当たるといことが最大の魅力となっていたという印象を受ける、と語っているような変化である。それは「⁽³⁸⁾霊修業」を表に出さなくなったということである。『金剛さまの思い出』、『続・金剛さまの思い出』を見ると、これ以後入信したという人の思い出話、岡野の行動の記述には、「～の土地を買っておけ」とか「～の商売はかわれ」とか言われたという話が多い。それと、もう1つは、献金活動を精力的に始めたということである。献金だけでなく、航空機献納、慰問など「⁽³⁹⁾献金現象」が解脱会におこっている。『解脱金剛伝』では、献金、慰問という形

で、「尊者はご自身が先頭を切ってその（戦時下の人の）あり方を示されている。（（ ）内筆者）、…尊者に従って行けばそこに救いの道が開かれた。…尊者はあらゆる面において、すべてを託せる巨大な道標だったのである。」と「献金現象」に参加して行くこと自体に宗教的意味を見出している。⁽⁴¹⁾

また、供出についても次のようにとらえられている。

「戦争中、会長先生のおうち（…）は全部あか（銅）の屋根でしたので、人夫を頼み、足場をかけ、みな取りはずしました。やかん、鍋、長火鉢、あか、どうこ、床の間のおきもの、水盤、薄端、プラチナ実印入れ、プラチナダイヤ入り指輪、めがね、ステキ、時計、神前一式、… 何一つ残さず献納されたのでございます。…とにかく全部… 廊下のレールの棒までとりはずして出されたのでございます。

大きなリヤカーで何台運んだことございましょう。国策に卒先して範を示されたのでございました。」⁽⁴²⁾

岡野が徹底して積極的に供出を行なった様子が描かれ、周囲にいた人がそれを範と見なししている。ここでは、解脱会にとって「献金現象」がどのような宗教的意味をもっていたのか、これ以前に岡野が、大祭で発表し、印刷し、レコードにも吹きこみ、現在は、カセットテープで集会の際などに聞かれている「五法則」を手がかりにして考えてみる。「五法則」⁽⁴³⁾の第二項目は「大自然の法則は、日々 三更 朝昼夜／月々 三則 上中下／四期の運行は春夏秋冬／如何なる文明科学の力にも及ばざる事の大自然であります」（用字すべてママ）というものである。「大自然」ということばは、他には、「自然の法則に従い、人間道を踏み誤るなよ」⁽⁴⁴⁾、「人間として生まれてきた以上、誰もが知らなければならないことは大自然の法則だよ」⁽⁴⁵⁾という使い方がされる。人間が守るべきこと、行なうべきことという意味である。また「水は上から下へ流れるものですが、下から風が吹けば、表面逆さまに浪を打っているように見えます。その実、水は依然として下へ流れて大海に注ぎます。これは大自然であるからであります。自然に逆らうことは遅いか早いか、きっと後悔の時代が参ります。」⁽⁴⁶⁾「自然に逆らうものは必ずゆきづまる時が来る。」⁽⁴⁷⁾と、逆らうとまづいことになるのが「自然」である。また、「自然」というのは、「よしや神は無言であっても万有は、雄弁に神に代って物語っている。」⁽⁴⁸⁾（「自然」ということばでなく「万有」が使われているが、「自然」の項目に入っている。）つまり、身のまわりのものすべてが神の現われなのである。さらに「与えられたことは出来ることなのだ、神様は出来ないことを与えはしない。」「神様は、必要があれば、其の人に、苦勞も刺激も与えられる。」⁽⁴⁹⁾つまり人に課されてくる仕事は、神の与えたものなのである。さらに「神を敬まうことは、目上、上々を尊敬すること」であるから、ごく身近の長上自体も神なのである。

「大自然」とは、自分に関わってくるすべての現象であり、すべての現象は神のあらわれ、と考えられている。また、「法則」ということは、「支部を離れての精進というような法則を無視しての努力は無駄な努力で…⁽⁵⁰⁾」というように、解脱会のきまりもしくは教祖の意向という意味にも使われている。「法則」とは、自分に関わりがあり、力が上のものの意向、きまりのことと受け取ることができる。

岡野にとっては、社会の構成要素である制度、役割などすべてが「大自然」であり、神のあらわれであるにとらえられていたと考えられる。国家の要求してくることがらにも、もっと身近な制度的秩序にも神は現われているのである。

「五法則」の三番目は「最高道徳に進みたいのであります。道徳に三道德あります。努力せず要求す（不道徳）、努力して要求す（普通道徳）、努力して要求せず（最高道徳）であります。是自然の恵みを待つのが最高道徳で有ります。」である。「大自然の法則」に従がい、「最高道徳」を実践した岡野が、どのように「自然の恵み」を得たかを見てみよう。

献金その他の活動は、1937年から始められ信者に呼びかけて毎年続けられて行く。例えば、1937年、軍人援護会へ200円、中丸小学校へ日の丸の小旗700本、村内遺族慰問金255円、海軍協会埼玉支部設立費500円。年を追うごとに全額がふえ、1943年、東京少年航空隊へ一万円、1944年、陸海軍へ航空機献金20万円、となっていく。そして、1937年から感謝状、メダルが贈られるようになり、1939年には献金新記録として新聞記事になったと伝記には記されている。1940年には、このような活動が認められて「紀元2600年式典」に招かれる。その日、岡野は、はおりはかまを新調し、それまでにもらったメダルをつけて写真屋に行き記念写真に納まる。そして、「この10年は長かった」「赤飯をたけ」といって自ら神前にそなえる。また「正しい者は最後の勝利者だ」と語る。1941年の「月報」に会長名で発表した文章の中では次のように語られる。「国運に逆行する宗教は亡ぶ。これが私が十年来、全霊に鞭して体得せる猛烈な試金石であります。」

先に、立教の年までの岡野の行動を、生家の人々、故郷の人々の中での位置を回復し、場の意味を転換させた、とまとめた。これは、別の言い方をすれば、その場を共有している人々から新しく見直されること、新しい承認を得ること、となる。承認されることで、相手の力は自分の方に向いて来るのであり、自己の位置は安定し、評価の高いものになって行く。

この承認し、力を得るということは、岡野が人に教えたとされる行為の中に、つまり、解脱会独自のものとして行なっている儀礼の中にも見られる。先祖も神も、人間が認め、「五法」によって活性化（あるいは「昇格」）して、「天茶」や給仕という贈りものを贈

ることで、特定の位置を与えられ、人間の側に力を与えてくる、と考えられている。また、制度的秩序が「大自然」即ち神の現われ、ととらえられており、それも、人の側が承認し、贈りものを与え、「心をこめて」接することで、感謝状やメダルという形で承認をもたらす、力をもたらす、ほめてくれるのである。直接与えたのでない所から、「要求せず」とも、社会的承認が与えられてくる。つまり、県代表として「紀元 2600 年式典」へ招待してくる。「自然の恵み」であろう。これは、「大日本帝国」という岡野や信者たちが、アイデンティファイすることのできる最大の集団からの承認である。であるから岡野は、このことに大きな意味を見出し、着物を新調したり記念写真をとったのであり、自己の行動の正しさの証明として、信者に伝えたのである。現在の解脱会によって受け取られ、描かれている教祖の行動、大きな手本としての行動は、以上のようなパターン、つまり、上位のものの承認を得る、そのことで力を得、さらに大きな承認、利益がもたらされる、というパターンとして把握することができる。

現在、解脱会の出版物、道場、支部、研修センターなどに掲げてある岡野の写真は、メダルをたくさんつけた、「記念式典」の時のものである。上位のものからの承認は、そのまま、教祖の「偉大さ」と考えられているのである。

6. 宗教的世界のモデルとしての聖地

聖地としての位置を確立していた地点に、岡野は自己の行動を記念する記念物とでもいえる石碑を立てて行く。それは、岡野が「解脱」ということばで表現した、岡野にとっての「正しい」行動を、物の形に表現したものである。

1939年から41年にかけて、現在「御霊地」と呼ばれているこの聖地の一带に四つの石碑が建てられる。1939年に「万靈魂祭塔」、これはすべての霊を供養するため、とされている。1940年には「大日本精神碑」（現在は「太陽精神碑」）。2月11日の除幕式で岡野は「…真に日本臣民の本分を尽くされたい…」と語り、現在も同じ日に行なわれる式典では法主により、当時の岡野の演説の内容がくり返されている。同年8月には、「北本宿駅開設記念碑」の除幕が行なわれる。これらの碑の文字は岡野自身の筆による。また翌1941年には、岡野の徳をたたえんとする「岡野聖憲師頌徳碑」が建てられる。現在、この碑の前の説明書きが強調しているのは、この頌の文字を書いたのが「前内閣総理大臣、海軍大将米内光政」である、ということである。

「駅開設記念碑」を除いた石碑の前では、現在、それぞれその碑を対象とした儀式が、「万靈魂祭塔」は年2回（春秋の「大祭」）、後2つは年1回行なわれ、そのつど、石碑の

由来が信者に説明され、教祖の生涯の物語の一部が語られたり、教祖の演説がくり返されたりしている。信者は、ここを訪れると、「太神社殿」から始まり、これらの石碑、「會長生家」を含む、何か所かを順に参拝するのが通例となっている。

1948年、死を直前にした岡野のことばとして次のものが伝えられている。

「三建碑に生命きざみ移し、精魂つくしこの碑に傾注した聖憲のたましい、かつて一歩も塔前を去らず、地球滅せざる限り、全会員を守る。⁶¹⁾」

「皆がわれなきのち、この三建碑に、ぬかづきひざまづき、真心をもって念ずれば、いかなる事も教える。⁶²⁾」

岡野が石碑の形で残したのは、いずれも岡野にとっての価値あるもの、岡野が「解脱」と感得したものである。岡野は自己の行動、及びそれを支えた理想なり価値なりを半永久的な空間的表現として作り出した。信者はいくつかの媒体を通して教祖の物語、及びそれに付随する雰囲気、テーマ、傾き、さらに価値を身につけて行く。大きな集团的儀礼が行なわれる場である聖地は、その中の最も典型的なもの、「発祥の地」として解脱会の世界が何であるか、何であったかを信者に提示する。またそれとともに、信者がこれから生きていこうとする宗教的世界一つの鑄型を与えるものの、新しいものを作り出していくためのモデルとしても存在している。

現在、この「御霊地」は、教祖の「法体」であると意味づけられ、ここでは、「五法」が特に強く働くともいわれている。「五法修業」を行なうと「子どもなど信者でなくてもどんどん霊動が出る」と言われたりもする。個人の守護霊を「御霊地」へ修行に出す、ということが行なわれるが、この時、用いられる「霊魂修業案内」のあて先は、「武州北本宿解脱金剛氣付」となっており、この聖地で教祖のもとで修行をして帰ってくる、という風に説明されている。支部単位、個人単位で月詣りが行なわれ、また、「会長の声を聞いた」という話がされたりするのも、この地である。

はじめに述べたように、解脱会の世界を支えているのは「五法」である。「五法」は霊の世界と人間の世界を媒介する力であり、教祖を通じて現わされた力、教祖を媒介としてもたらされた力であり、教祖の力でもある。解脱会の信者は、その力によって、現在自己の生きている世界の意味を転換させ、新しい世界、「解脱の世界」に生きる、あるいは、生きるべく行動して行く。それは「解脱に精進する」と表現されている。

別の言い方をすれば、信者の崇拜ないし信仰の向かう先、注視の先には「解脱金剛」としてまつられている教祖がある。信じられ、祈られているのは教祖である、といえる。そして、現在の解脱会によって受け取られ伝えられている教祖の物語、及び教祖の「法体」であるといわれここはほかとちがうと確信をもって語られる聖地「御霊地」は、この「解脱

の世界」をつくり出し、そこに生きるための行動のモデルとして継承されている。それは解脱会の信者の模範としてのモデルを形成すると同時に、信者の信仰の世界、信仰活動をその根底において支えているのである。

現在の解脱会の信仰の世界から教祖を見る時、それは「人間として行なうべきこと」を信者に示した人物、超自然的な力を人間の側に媒介した人物、「師」「理想」と、とらえられていることが理解される。その立場で書かれた教祖の伝記は、従って、その点をあきらかにし、それを信者に語り、信者が日々の信仰活動の中で、信仰の先行者から受け取る様々なことば、表現を裏づけるもの、として提示される。また、それは現在の信仰の世界の起源の物語であり、なぜ、今、信者が聞いたり行なったりすることが「正しい」ことであるのかを、間接的ながらも具体的に語っている。ここに描かれた教祖は、現在の信者の体験の枠組み、つまり信者の受け取った「真理」にもとづいて描かれたもの、その視点でとらえられた限りの教祖であり、その描き方には、伝記の記述に参加した人々が「真理」と感得したものが当然反映されているからである。

このような物語、一つの来歴の物語に支えられた世界、また、そこで語られる諸要素が配された世界の中で、個々の信者がどのように自己の世界を形成していくかについては、稿を改めたい。

(註)

- (1) 月刊誌『解脱』（解脱会発行）1984年各号表紙裏など。
- (2) 宮家・エアハート編『伝統的宗教の再生、解脱会の思想と行動』1983年 名著出版 p.119
- (3) 同書 p.149
- (4) 同書 p.118
- (5) 石井、河東、藤井、「島田氏の書評に答えて」（『東京大学宗教学年報Ⅰ』1984年）
- (6) この論文は1985年度修士論文の第三章をもとにした。
- (7) 「解脱会会規」1981年 第22条
- (8) 例えば、『解脱実修要典第二巻』1982年 解脱会 p.97など。
- (9) 解脱会には解脱会独自の言葉づかい、いいまわしがある。解脱会の世界に入っていくことは、このことばの使い方を習得していくことでもある。
- (10) 例えば、『解脱実修要典第一巻』第6版 1982年 解脱会 p.116
- (11) 「勤行法則」（解脱会）の中の「五信条」の項。
- (12) 主なものとして『解脱金剛伝』1978年、『金剛さまの思い出』1972年、岸田英山『誠』1981年（以上解脱会）があるが、これらの本は編集過程の性格上同一と考えて良い集団の手になるものであり、「群」として扱う。
- (13) 『解脱金剛伝』 p.517
- (14) 同書 p.517
- (15) Reynolds, Frank E.& Donald Capps eds. *The Biographical Process, Studies in the History and Psychology of Religion* 1976年 Mouton p.4

- (16) 同書 p.3
- (17) 『解脱金剛伝』 p.484
- (18) 「会規」第五条, 第三条。
- (19) 『解脱金剛伝』 p p.205 — 208
- (20) 同書 p p.210 — 213
- (21) 同書 p.210
- (22) 同書 p.62
- (23) 同書 p.89
- (24) 現在「ご本家」と呼ばれ, 信者の参拝の対象になっている。ここには解脱会北本宿支部がある。
- (25) 『解脱金剛伝』 p.199
- (26) 信者談
- (27) 『統・金剛さまの思い出』 p p.85—7 要約 カッコ内は原文のまま
- (28) 『解脱金剛伝』 p.246 同上
- (29) 同書 p.246 同上
- (30) 同書 p p.247—8 同上
- (31) 同書 p p.234—240
- (32) 同書 p.110
- (33) 井口前掲書 p p.126—7
- (34) 岸田前掲書 p p.79—80
- (35) 『金剛さまの思い出』 p.212
- (36) 岸田前掲書 p.80
- (37) 『解脱金剛伝』 p.275, p.305
- (38) 前に述べた「五法修業」は「霊修業」と呼ばれていた。
- (39) 藤井忠俊『国防婦人会』1985年 岩波書店 p.9
- (40) 『解脱金剛伝』 p.331
- (41) 藤井健志はこのことを「解脱会を守るため」という時代への適応という視点から描いている。
(前出『伝統的宗教の再生』 p p.68—9) そのような効果があったことは無視できないが, 解脱会の自己理解に則していえば, 献金をすること自体に意味があるということにも着目すべきであろう。
- (42) 井口前掲書 p p.213—4
- (43) ここで引用に使ったのは『ご聖訓第一巻』1978年解脱会
- (44) 『御遺訓集』1979年解脱会
- (45) 同書 p.91
- (46) 同書 p.92
- (47) 同書 p.87
- (48) 同書 p.86
- (49) 同書 p.57
- (50) 『金剛さまの思い出』 p.52
- (51) 『解脱金剛伝』 p.498
- (52) 井口前掲書 p.314